

8.15、時の刻み方

一地球市民の書棚から⑱

地球市民 大村 昌宏



69 回目の 8 月 15 日がめぐってきた。最近 80 代後半になった父母と会う度に戦争中の話を聞くようになった。こちらは聞けるうちに聴いておきたいし、父母は伝えたいことがあるのだろう。母の最近の口癖「長生きするとうろくなことはない」だ。曾孫と会うと笑顔がこぼれるが、最近の世情がそう思わせるのか残念でならない。何度も死線をこえてきた父母の世代。戦後生れの私の頭上には、幸い一発の爆弾も弾丸も飛んできたことはない。日本国は、半世紀以上、戦争の当事国になったことがない。「平和である」からこそこうして命を繋いでいけることに感謝したい。

今回は、「8.15 の意味」と「時の刻み方」について考えた。

時を刻む

今、私たちは、何時、何分、何秒と時を刻む。しかしこの時の刻み方(太陽歴)が、日本において導入されたのは意外と新しい。百年ちょっとしか経っていないのだ。明治6年(1873年)、明治政府は、それまでの太陰太陽歴(旧暦)をやめ太陽歴(新歴)を導入した。旧暦においては、「刻」で時間を表していた。最小の単位である「四半刻」は30分前後もあり、「日の長さ」によって伸びたり縮んだりした。

「時間を支配する」もの

原武史さんが、「誰が日本の時間を支配しているのか・・・時間と政治」(「知の訓練 日本にとって政治とは何か」2013年 新潮社)を論じている。以下原さんから

明治政府は「天皇の支配」を徹底するために「時間の支配」を押し進めた。明治維新まで、天皇は京都御所の中でくらしていた。日本人のほとんどは天皇の存在すら知らなかった、日本の国民であることも自覚していなかった。

明治政府は、「時間を支配する」ことで天皇の支配を、そして大日本帝国の臣民であることを国民に刷り込んでいった。時間の支配は、まず軍隊、学校、役所で始まった。「何時何分何秒という時間によって行動が決定された」。そして全国にはりめぐらされつつあった鉄道を使つての天皇や皇太子の行幸啓で時間の支配を広げた。大嘗祭、紀元節等、天皇にまつわる行事に国民は、分秒単位で動員された。「特定の時間に合わせて、全国

民が同じ行動をする」時間厳守」が叩き込まれた。

昭和3年(1928年)昭和天皇の即位を祝う行事として始まった「ラジオ体操」。早朝の同じ時間に人々が集められ、掛け声とともに同じ体操をする。出席しなければ「非国民」と呼ばれた。

「時間の支配」が頂点に達したのが、1945年8月15日正午。植民地であった朝鮮半島や台湾、満州国においても重要な放送があると人々はラジオの前に集められた。4分10秒の録音された天皇の肉声を聞かされた(玉音放送)。その後のアナウンサーの解説で、人々は戦争が終わったことを知った。「ラジオ放送を数分流しただけで日本国民は、戦意を喪失した」世界は驚いた。

時間を巻き戻し、歴史を改竄した靖国

靖国神社では、時間を巻き戻し、歴史が改竄された。

靖国神社には、天皇のために戦死した御霊、246万6千柱が祀られている。当初、A級戦犯は、祭られていなかった。しかし昭和53年(1978年)密かに合祀された。靖国神社は、1952年サンフランシスコ平和条約が発効し、独立が回復されるまで戦争は継続していたと解釈した。その間に責任をとわれ処刑された戦争指導者も「神として祀った」。靖国神社は、「東京裁判も占領統治も否定」した。

靖国神社は、帝国陸海軍が管理する「軍事施設」だった。天皇のために死ねば誰も等しく靖国で神になれる。軍国日本にとって靖国は、国民を戦争に動員する上で大きな役割をはたした。軍国日

本においては、「国家神道」は宗教ではないとされた。宗教とは、政府が認めた宗教諸派であり、天皇を崇敬し神社に詣でることは全ての国民の義務であるとされた。だから仏教徒もキリスト教徒も神社への参拝を強要され、拒めば弾圧された。

1945年、進駐してきた米国は、軍国日本の要である靖国神社を解体しなかった。「信教の自由」を守るとして、軍事施設から宗教法人に衣替えした靖国神社を存続させた。

1946年に設立された宗教法人「神社本庁」。伊勢神宮を「本宗」とし全国の多くの神社が加盟している。神社本庁は、「GHQによる占領改革を覆し、憲法を改正して再び天皇主権を確立させる」ことを求めている。

「まつりごと」は、継続された

昭和天皇は、皇居の外では、「象徴天皇」となったが、皇居にもどると、1945年前と変わらない「宮中祭祀」を継続していた。

日本でいう「まつりごと」とは、「(狭義の)政治と祭祀があり、前者は臣下の天皇に対する奉仕」を、後者は天皇の「神」に対する奉仕を意味する。

天皇は戦後、は政治的な統治者でなくなったが、皇居での祭祀は継続していた。戦後も宮中で、古代以来の「まつりごと」がひっそりと受け継がれている。

政治とまつりごと

「政治」という漢字は中国から来た。一人のすぐれた徳をもった君主、「天」から「命」を与えられた「天子」による統治を意味する。「刑政」=「言葉による統治」よりも、「礼楽」=「言葉によらず、儀礼や音楽を通して民を知らず知らずのうちに感化する」方が優れている、とされた。

言葉によるコミュニケーションを前提とする英語の「ポリティックス」とは全く意味が異なる。

「広場の政治」を

日本においては、いまだ「言葉を媒介とする西洋流の政治」が未だ確立していない。しかも「民主主義」は代議制という間接的な制度でしか考えられなくなってきた。民意は選挙の時でしか示すことができないような感覚になっている。「広場の政治」が根付いていれば、選挙以外の時でも、人々が集まって政治的な主張を掲げ、政治家もそ

うした主張に耳を傾ける機会が確保される。」「民主主義を単なる制度」として考えるのか、あるいは「それが実現される空間まで含め」考えるかによって、その中身が大きく違ってくる。

東京の中心には、世界一大きな広場がある。(皇居前広場)。敗戦直後、この皇居前広場は「人民広場」と呼ばれ、1946年のメーデーには、50万人の人々が集まった。しかしその後の占領政策の変更により、市民の使用は禁止され、今では天皇や皇室のための集会にしか使用されていない。

以上、原さんによる。

*原武史「知の訓練 日本にとって政治とは何か」
2014年 新潮社

<参考>

原武史・吉田裕「岩波 天皇・皇室辞典」
2005年 岩波書店

原武史「可視化された帝国 近代日本の行幸啓」
増補版 2011年 みすず書房

日本で一番短い法律「元号法」

(昭和五十四年六月十二日法律第四十三号)

- 1 元号は、政令で定める。
- 2 元号は、皇位の継承があつた場合に限り改める。

附 則

- 1 この法律は、公布の日から施行する。
- 2 昭和の元号は、本則第一項の規定に基づき定められたものとする。

全文 29文字、たったこれだけだ。そして政府の統一見解では、「元号は国民に強制されるものではない」とされた。しかし現実はどうだろうか。公文書には、かならず元号が記載され、使用が半ば強制されている。昭和 年に 25 をプラスすると西暦 19 年になる。では平成では、明治では、いつも苦勞する。国際化、世界標準を推進する日本国政府は、国民にこのやっかいな元号を押しつけている。一番困るのは世界史と関連づけて考えることが邪魔されることだ。元号は天皇の世襲がある度に変わる。元号では、どの天皇の世であったか否応なしに反復させられる。大正 年生れなら大正天皇。昭和 年なら昭和天皇。

1966年、祝日法の改正により、2月11日が「建国記念日」とされ軍国日本の「紀元節」が名称を変えて復活した。「神武天皇が即位した日を日本の

建国日」としたのだ。

ヒロシマ紀元、「核時代」

故芝田進午さんが提唱していたヒロシマ紀元だ。芝田さんは1945年を核時代元年とした。1945年8月6日、地球上で初めて市民の頭上に核爆弾が投下された。人類は、自らを何度も滅亡させる手段、核兵器を手にした。芝田さんは、核廃絶の思いを込めてヒロシマ紀元を提唱した。
*) 芝田進午「核時代 思想と展望」1987年 青木書店

「象徴天皇」の 8.15

今上天皇には、頭がさがる。病気の身をおして被災地を訪ね被災者を見舞う。激戦のあった多くの戦地を訪ね慰霊する。韓国との関係を憂い「私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると、続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じています。武寧王は日本との関係が深く、この時以来、日本に五経博士が代々招へいされるようになりました。また、武寧王の子、聖明王は、日本に仏教を伝えたことで知られております。しかし、残念なことに、韓国との交流は、このような交流ばかりではありませんでした。このことを、私どもは忘れてはならないと思います。」(平成13年12月18日)と発言された。

8.15を考える時、「天皇制と政治」をタブーなしで、論ずる必要がある。「気がつかないうちに」全体主義の国になっては困るのだ。天皇を二度と政治利用させてはならない。日本国憲法は、「個人を尊重」し、私たち国民一人一人が自分の「幸福を追求」する権利があると明記している。赤紙(召集令状)1枚で家族が引き裂かれ、人生が奪われ、集団死させられることは、二度とあってはならない。日本国民には、ふだんの努力で平和と民主主義を守る義務がある。

核時代 59年8月10日

<付録> 前号、未掲載分

コピペのオボちゃんスタッフ騒動

「彼女、科学者というより役者だね」テレビの記者会見を観てそう思ったのは私だけだろうか。そうこの騒動自体すでに科学・技術をめぐる問題というより、お昼のワイドショーのゴシップニュースになった感がある。「赤っ恥会見」と報じた海

外メディアも。世界の理研のブランドも地に落ちたものだ。

冷や汗をかき、巻き込まれなくてホットしているのは安倍ちゃんだろう。アホノミックスの第三の矢、成長戦略の一つ再生医療、女性の社会進出の象徴としてコピペのオボちゃんを利用しようとしていたからだ。

宇宙物理学者の池内了さんは、<科学の研究の現場で「知の頹廃」が起きている。>(朝日新聞 2014/4/10)と厳しく指摘している。背景には科学の現場に持ち込まれた成果主義があるようだ。<科学の真実は一つ。捏造すればいずれはばれる>。

鉛筆と消しゴム、万年筆

オボちゃん騒動で気がついたのが「実験ノート」の存在だ。何時、何をと記入し、記録を残す。後で改竄できないようにページには通し番号が入っている。実験ノートをきちっとつけるのは研究者の絶対条件だ。オボちゃんは、これが「未熟」だったそうだ。

ニューズウィークにハットさせられる記事があった。(スティーブン・ウォルツシュ「日本の学校教育に足りないのは万年筆だ」ニューズウィーク 2014.3.26)

英国生まれのスティーブンさんは不思議だった。日本の学校教育では、なぜ万年筆を使わず、鉛筆と消しゴムなの？

鉛筆は、ペンが使えない幼い子どもに使わせるもの。万年筆を使えば、その子の思考過程が見える。間違いに気づけば、線を引いて訂正する。記録として残るので自分自身が振り返る時にも便利だし、教師もその子の成長過程が分かる。

鉛筆と消しゴムを使っているのは、結果しか分からない。ノートは確かにいつもきれいだろうけれど、「正解」だけをいつも求めている日本の学校教育。結果として「間違い」を恐れ「リスクを回避」するようになっていかないか。

科学の分野においても、社会においても今の正解がいつまでも正解とは限らない。スティーブさんは提案する。「失敗は前進のプロセス」だ。1本の万年筆が日本を改革する。

(2014/5/4)